

地域文化観光資源としての民藝の可能性

渡邊 太 (Futoshi WATANABE)

鳥取短期大学 国際文化交流学科

【目 的】

私は、大阪から鳥取中部に転居した2018（平成30）年から、鳥取中部の芸術文化史に関心を抱いて調査を実施してきた。長谷川富三郎、高木啓太郎、徳吉英雄、吉田たすく、山本竜門など、郷土の優れた芸術家たちの足跡を辿るとともに、市中で親しまれた作品に接し、鳥取中部が持つ文化芸術資源のポテンシャルの高さに着目していた。所属先の国際文化交流学科では、2021（令和3）年度から鳥取県との寄付講座設置に係る協定にもとづく「創造的観光人材育成プログラム」が開始し、教育活動を通じて地域の観光振興に寄与することも学科のミッションとなった。

本研究の目的は、民藝を芸術文化資源として観光に活用する可能性を探ることである。民藝は、芸術理論であるとともに民衆の生活を改善する生活文化運動論でもある。民藝の創始者・柳宗悦は、全国各地を巡り、その地域固有の民藝を紹介する『手仕事の日本』¹⁾を著した。民藝の理念において地域の固有性はきわめて重要である。自然と歴史の風土を刻印された地域の固有性に由来する工芸品は他の地域の産品とは代替できない点で、唯一無二の価値を有する。地域の固有性は、観光の視点においても重要であり、民藝には観光資源として活用できる潜在力が高いと考えられる。

【内 容】

1. 民藝と観光の不幸な出会い

民藝と観光は、不幸な出会いがあったと言えるかもしれない。昭和の時代に起きた「民芸ブーム」は、国内観光ブームと相まって大衆流行現象となったが、流行が拡大すればするほど本来の民藝概念からの遊離が著しくなり、観光を通じた流行がむしろ民藝本来の理念を見失わせる結果となったかのようにも思われるからである^{注1)}。

そもそも民藝とは、無名の工人が庶民の日用品として制作する民衆的工藝を指す造語である。民藝には、華美で装飾的な芸術品とは異なる力強く健康的な美が備わる。民藝を造語した柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎らは、日本人が身近な暮らしの中で美しい品物に親しんできたことに注目し、庶民の日用品など無価値なものを見過ごされてきたその美しさを称賛し、大量生産に向かう中で手仕事の価値を守るために民藝運動を開始し、1920年代から精力的に活動した。民藝は全国各地に広がり、地方ごとに展開していった。

敗戦後、1960年代頃になると、「民芸ブーム」と呼ばれる流行現象が起きる。文化地理学者の濱田琢司によれば、『民芸ブーム』という用語は、一般には、1960年代から70年代にかけてみられた、いわゆる『民芸品』の一大消費ブームのことを指す。この時代の民芸品消費熱は、文字通り、「ブーム」と呼べるもので、いくつかの工芸産地においては、その消費に合わせて、作風を「民芸調」に転換するといった事例もみられるほどであった^{注2)}。だが、このブームは1980年頃から廃れていったようである。

濱田は、こうした「民芸ブーム」の背景として、高度経済成長の反動として日本的伝統への関心が高まったことに加えて、観光の一般化と場所の消費という要因を指摘する。高度経済成長を実現し、生活がめまぐるしく変化するなかで生じた日本的なものへの郷愁の高まりをすくい取る形で、1970

年から国鉄の「ディスカバージャパン」キャンペーンが始まり、各地の特産品消費として「民芸ブーム」を後押しした。濱田によれば、当初は歓迎していた民藝運動の同人達も、やがて「過ぎた商業主義」として否定的になったという。

思想運動から切り離され商品化された「民芸」は、雑器すなわち安価なものというイメージも発生し、さらに流行となったことで、ひとたび流行が去ると「古臭い」対象と見なされるようになる。濱田によれば、柳らの民藝運動とブームとしての「民芸」が切断されるのが1960年代後半頃である³⁾。こうして見ると、国鉄の「ディスカバージャパン」に象徴される大衆観光と出会ったことは、民藝にとって不幸な結末に終わったようにも思える。

2. ポスト・マス・ツーリズムの民藝

巡礼や旅は遙か昔から営まれてきたが、現代的な観光のルーツとしては資本主義的賃労働が一般化し労働と余暇が分化する初期近代に遡る。19世紀半ば、禁酒運動の活動家だったトーマス・クックは禁酒運動大会への参加を募り団体旅行を手配し、近代的なツアーの端緒を開く。その後、商業的なツアーが商品化され、労働者大衆が手軽に旅行できるようになる。

一般大衆が大挙して観光地を訪れる旅行形態はマス・ツーリズム（大衆観光）と呼ばれる。パッケージされた団体旅行は、旅行参加を気軽にするものとしてマス・ツーリズムの普及に貢献した。日本でも東京五輪を引き金とする東海道新幹線開業・高速道路整備を機に1960年代から国内観光がブームとなった。先に述べた通り、そのなかで民藝も「民芸ブーム」として消費され、ブームが過ぎると時代遅れのものと見なされた。

だが、マス・ツーリズムはその成功と拡大の末に曲がり角を迎える。マス・ツーリズムの結果として、「観光地の文化変容、犯罪や売春の発生、環境の汚染や破壊」や、「ホスト（観光地住民）に対するゲスト（観光者）の経済的・社会的優位性、そして先進国企業による経済的支配などに帰着する『ネオ植民地主義』や『ネオ帝国主義』の問題⁴⁾が生じる。また、マス・ツーリズムの発展とともに各地で観光リゾート開発が進むが、その結果としてどの観光地も似たり寄ったりとなる均質化が進み、さらに都市環境のテーマパーク化によって日常・非日常の境界も融解していく。

こうした環境変化にともない、マス・ツーリズムに代わる観光として、1980年代からオルタナティブ・ツーリズムへの注目が高まる。自然環境保全を主題とするエコツーリズム、農林漁業体験を組み入れたグリーン・ツーリズム、産業遺産や伝統産業を学ぶインダストリアル・ツーリズム、健康志向のヘルス・ツーリズム、アニメーションや漫画にゆかりの地を訪れるコンテンツ・ツーリズムなど、関心の多様化に応じた多様なツーリズム形態が出現している。これらオルタナティブ・ツーリズムに対応する観光商品は、旅行会社が主導する「発地型観光」ではなく地域主導で企画する「着地型観光」として注目されている。また、観光行動の個人化にもともない、近年は組織された団体旅行ではなく個人旅行が支配的な旅行形態となっている。

観光をめぐる一連の変化を指して、ポスト・マス・ツーリズムの時代と形容されることもある。近代的なマス・ツーリズムの誕生から百年以上の時を経て、観光の多様化と個人化、そして地域の主体性が現在のトレンドである。

かかる観光の変容の文脈にあらためて民藝を位置づけるとどうか。

濱田は、「民芸ブーム」を経た上で、2000年前後頃に民藝をめぐる認識の転換が生じたことを指摘する。セレクトショップのビームスが1990年代後半に北欧のインテリアを扱うセクションを立ち上げ、その動きの中で日本民藝館三代目の館長を努めた柳宗理との交流が始まり、北欧のモダンデザインとの民藝の共通性が見出される。先進的なセレクトショップであるビームスが取り扱くと、追走して民藝品を扱うセレクトショップや雑貨屋も急速に増加した。濱田は、こうした動向について、「高度成長期のブームにおいて、運動から切り離されて一般化した民芸が、近年になって再び原点へと回帰していくような状況がみられる⁵⁾と指摘する。

哲学者の鞍田崇は、2012年に無印良品などのデザイナーとして活躍した深澤直人が日本民藝館の

館長に就任したことに注目する。鞍田は、日本民藝館で行われた「新館長と語り合う会」で、デザインを環境との調和としてとらえ環境の歪みを整え直すことを語った深澤の姿勢に賛同し、そこに民藝に対する現代社会の共感の根拠を読み取っている。鞍田は、民藝のうちに審美的にセレクトする要素と新しく社会とライフスタイルを創造する要素が共に含まれるとし、ライフスタイルを創造する部分に民藝の現代性がより強くあらわれると見る。そして、近代化による故郷喪失のなかで人間性を取り戻すために、民藝を通じたインティマシー（いとおしさ）のデザインに可能性を見出す⁶⁾。

鞍田が指摘する社会意識と生活意識の変化は、マス・ツーリズムからオルタナティブ・ツーリズムへの観光の変容と共鳴しているように思われる。観光者が現場で体験学習を行う観光形態は、観光学でスペシャル・インタレスト・ツーリズムと呼ばれる。こうした観光に民藝を組み合わせると、1980年代までの「民芸ブーム」とは異なり民藝をより深く学ぶことも期待できる。単にお土産として民芸風のものを購入するだけでなく、制作現場を訪れて制作者から学び、部分的にでも制作過程に触れる経験は、支配的な価値を相対化しライフスタイルを見直すきっかけにもなるかもしれない。「民芸ブーム」における民藝と観光の不幸な出会いを経て、いまこそ再び民藝と観光が出会い直す好機と言える。

3. 倉吉の取り組み

鳥取中部に位置する倉吉では、中心市街地にあたる赤瓦・白壁土蔵群周辺エリアが観光地として、県内では水木しげるロード（境港市）、鳥取砂丘（鳥取市）に次ぐ集客力を有する。

倉吉の市中で民藝に触れる機会としては、商店のウィンドウやあちこちの飲食店内に掛けられた長谷川富三郎の版画がもっとも目にしやすいだろう。打吹公園内にも打吹童子を描いたレリーフが設置されている。写真家の高木啓太郎が開いた土蔵蕎麦も営業中で、店内には高木が蒐集した民藝品が多数置かれている。棟方志功が訪れた際の写真も飾られている。二階の民藝画廊は常設ではないが、陶芸の展示販売などイベントの折には開かれ、一階では民藝品も販売している。長谷川や高木がよく訪れて民藝談義にふけた山陰民具は、骨董や古道具を商い、長谷川の版画はもちろん、他にも加納告保や野崎信次郎ら地元作家の作品もあつかう。店舗じたいが国登録有形文化財でもある。

重要伝統的建造物群である白壁土蔵群を観光地として活用し地域活性化を図る株式会社赤瓦は、店舗などを「赤瓦〇号館」として指定し、現在は一号館から十八号館まで拡大している。竹細工を商う中野竹藝の赤瓦三号館、古民家喫茶の赤瓦五号館、打吹焼の陶芸体験ができる赤瓦十一号館など、それぞれユニークな施設が見所である。白壁土蔵群のなかで営業するセレクトショップのcocorostoreでは、鳥取県内の民藝品・工芸品を中心に販売している。鳥取東部で郷土玩具を制作していた柳屋を継承したりプロダクト玩具の企画・販売も手掛ける。セレクトショップでは、ガラス作家・大屋具子の作品と厳選された工芸品や衣料品を商うsaonもエリア内で営業する。

「はこたん」の相性で親しまれる倉吉の郷土玩具はこた人形は備後屋・三好平吉が制作していたが後継者がなく保存会が技術を引き継ぎ、今は二人の職人が制作している。はこた人形工房では、絵付け体験もできる。倉吉ふるさと工芸館では、倉吉緋を用いた商品販売し、機織りの実演見学もできる。倉吉観光MICE協会では、倉吉緋の着物を着たまち歩き体験を提供している。また、白壁土蔵群周辺まで含めてあちこちの店舗の軒先に仏師・山本竜門が制作した福の神の彫刻が設置されている。山本は、倉吉を福の神に会える街にしたいと願い、木彫りの彫刻を通じて地域活性化に貢献した。

最近の取り組みとしては、倉吉市中心市街地活性化協議会による「のれんの揺れるまちプロジェクト」として、白壁土蔵群の赤瓦各館や周辺店舗に倉吉緋で制作した暖簾を掲げる活動が2022年から始まっている。街を歩くと自然に倉吉緋が目に入る景観づくりにより、郷土の工芸への認知が高まることを期待できる。倉吉観光MICE協会では、はこた人形をはじめとする倉吉張子を題材とした缶バッジを新たに制作し、観光案内所でガチャガチャ販売している。はこた人形、起き上がり、虎、因伯牛、狐面、因幡の白兔の六種に加えてシークレット一種の全七種で、大きめの缶バッジとしてかわいらしく仕上がっている。

先に触れた山本竜門の彫刻に加えて、倉吉には他にも仏師の仲倉裕朋、小谷和上の作品が街中に点在する。打吹地区の商業者らによるあきない中心倉では、「福の神にあえる街くらよしスタンプラリー」を実施し、ユニークな木彫りの彫刻が点在する倉吉独自の景色に注目を促している。

4. 課題

白壁土蔵群を中心に倉吉でも民藝を観光振興に活かす取り組みは様々に試みられている。しかしながら、県外への発信も県内での認知もいまだ十分ではないように思われる。まずは地元の認知を広げ、情報発信を強化することが必要だろう。外に発信するためにも、その前段として地域住民が地域文化資源の価値に気づくことが必要である。また、民藝に触れる入り口は様々に用意されているが、一歩踏み込んで理解を深める工夫も欲しい。

従来からあるものを現代の視点で再解釈し、暮らしを見直し新たな価値を発見するきっかけとなる点で、民藝とポスト・マス・ツーリズムの観光はシンクロするところがある。いまだ十分には展開できていないかもしれないが、鳥取中部の民藝を観光資源として活用するポテンシャルは大きいと言える。地域資源の価値を見直し、新たな活用を促す魅力的な物語づくりが求められる。

付記 本稿は令和4年度鳥取看護大学・鳥取短期大学地域研究・活動推進事業助成金「地域文化観光資源としての民藝の可能性」報告書『郷土の芸術文化資源の活用と記録』（2023年3月発行）所収の論考の一部に加筆修正したものである。

《注》

- 1) 本稿では、柳宗悦らの理念を継承した活動を「民藝」、柳らの理念から離れたものを「民芸」として使い分ける用法をとっている。

《参考文献》

- 1) 柳宗悦『手仕事の日本』岩波書店、1985年
- 2) 濱田琢司「民芸ブームの系譜についての覚書——一九三〇年代から現代まで」『南山大学日本文化学科論集』15、2015年、pp. 15-29
- 3) 濱田琢司「民芸ブームの一側面：都市で消費された地方文化」『人文論究』50（2/3）、2000年、pp. 111-124
- 4) 岡本伸之編『観光学入門——ポスト・マス・ツーリズムの観光学』有斐閣、2001年、pp. 50-51
- 5) 濱田、前掲論文、p. 27
- 6) 鞍田崇『民藝のインティマシー——「いとおしさ」をデザインする』明治大学出版会、2015年、p. 176

《研究協力》

伊藤泉美（倉吉博物館）、岡田有美子（インディペンデント・キュレーター）

【成果】

研究成果として、渡邊太研究室編『郷土の芸術文化資源の活用と記録——吉田たすくと長谷川富三郎』令和4年度鳥取看護大学・鳥取短期大学地域研究・活動推進事業助成金「地域文化観光資源としての民藝の可能性」報告書（2023年3月）を発行した。また、研究成果の公表として、鳥取大学公開授業講座「民藝という美学～地域にひそむ新たな価値の発見」（2022年9月15日～9月18日）において、「倉吉の民藝運動から見た地域社会」と題した講義を行った。